

NHK と政治の関係が問われている

改元「騒動」から安倍・トランプ「へつらい外交」まで、とりわけNHKのニュース番組の酷さをあらためて痛感している。写真は2月5日にレポートした元NHK記者、相澤冬樹さんによる渾身のノンフィクション。表紙カバー「なぜ放送されないんだ！」が心に迫る。

たまたま手にした『前衛』6月号「NHKと政治の関係が問われている 永田浩三さんに聞く」に注目した。永田さんは長年にわたりNHKディレクターなどとして活躍してきた。永田さんの鋭い指摘はフェイスブックで毎日のように読んでいたが、こうして14ページに及ぶ発言から学ぶことは多い。2点だけ抜粋して紹介したい。



私が身を置いてきた放送の世界で言えば、放送法第1条第3項に「健全な民主主義の発達に資するようにすること」と書いてあります。そもそも戦前・戦中のラジオは、権力の道具でもあり、政府や軍の広報機関でもありました。むしろ忖度をして積極的に戦争の旗振り—御国のためにより奉仕するにはどうしたらいいかを、言われてやっている部分と、言われてもいないのに、エスカレートさせて放送する—をやってきた苦い歴史がありました。それを改めるために、戦後NHKは再出発をし、1950年に放送法ができたときも、すでに戦後民主主義の変質は始まっていたにもかかわらず、第1条に「民主主義の発達に資するようにすること」という一文を入れたのです。

ニュース報道で、私が一番やってはいけないことだと思っているのは、知っているのに伝えないことです。森友・加計問題でも、NHKの社会部、なかでも大阪の社会部の記者たちは、他社にさきがけて追及していました。国有地を8億円以上値引きして払い下げた森友学園問題も、文書の改竄などを実務としてやらされた方が自殺をするわけですが、そのことを含め一連の取材で、NHKはどの社よりも食い込んでいたと思います。にもかかわらず、最終的なニュースというものにならないのは、とても深刻です。加計学園問題でも、新学部認可についておかしいことがおこっていて、そのことについての前川喜平元文科事務次官の証言について、証言を真っ先にとり、また現役の文科省の官僚たちにも事実を確かめて裏をとっていたのはNHKの社会部の20代後半の記者です。前川さんは、記者が自宅の前で張って、もう逃げられないと観念してしゃべるわけです。そういうスクープをしておきながら、今日まで使わないってどういうことなのか。一番最初は「朝日」のスクープだったと言われていますが、NHKも、ちゃんと取材も届いているし、原稿化もしている。それがお蔵入りになっていることがとても残念です。

安倍政権に忖度して過大に伝え、「知っているのに伝えない」NHKに怒りを覚える。

(2019年6月2日)